

## 娘の引越し



末娘が帰郷することになった。帰郷といっても鹿児島で育った訳ではないから、正確には定年で夫の郷里鹿児島に戻った私たちの処にやって来るのだ。

いろいろな都合から私は夫より一年早く三年前に鹿児島島の生活を始めた。夫は下の子二人と都心のマンション暮らしで、定年までの一年を過ごした後、故郷に戻ってきた。その後の二年間、大手生保会社に勤務の末娘は、お兄ちゃんである大学生の三男とそのマンションで過ごしていた。この春三男が仏教系の大学を卒業し、亡き祖父の建立した霧ヶ峰の昭和寺住職として赴くこととなり、東京を離れる。定年後も何とか続けてきた私たちの補助もこれまでとなった。

となると現在のマンションの十二万円のお家賃は娘の稼ぎでは払いきれない。それに狭いマンションに移ったとしても、都会の娘の一人暮らしは親の身には心

配の種だ。姑を抱えての私たちの老後も心細く思えた。この際手元に呼び寄せよと説得にかかったのだが、案外すんなりと承知してくれた。

娘の入社翌年からリストラが始まり、後続の入社女子社員がなかったから、娘は四年間も最若輩のままだった。若くて人気者の我が娘は、ずらりという高給取りの独身「お局様」には結構悩まされて来たようだ。その上マンション近くにストーカーめいた人もいるとかで、気持ち悪く思っていた矢先らしい。

三月末、私は父の一周忌の法要もあつて上京することにした。引越しの手伝いと東京には三日前に着いた。待ち合わせた息子とマンションの部屋に入った。と国分寺に住む長男の嫁から電話があった。

「マンションの管理会社に解約の連絡をしたつもりが相手がその会社の子会社の保険担当の会社だったぞつで、送られた書類に書き込んで出したのだが、それは単なる銀行の家賃引落しの解約だったとかで、違約金として七万円払えと言われている」

と言つ。鹿児島からは遠いので、賃貸契約の切替えなどは長男に依頼してあつた。解約は一カ月前にとの

ことだったから、私は早々に申し出るよう二カ月ほど前に嫁に頼んでおいたのだが、契約書の封筒にはいくつもの同じような名前が並んでいる。嫁は間違つて予会社の方に連絡したらしい。しかし間違つたとしても同一系列の会社として正しい連絡先を教えるとか、親会社に連絡してくれてもよいのではないだろうか。

私は管理会社に電話を試してみたのだが、相手はあくまで正式な解約申込書が出されていないからと一歩も引かない。結局嫁が尻拭いすることとなった。また嫁から電話である。「管理会社からの連絡で、原状に戻さねば補修費を敷金から差し引くとのことです。前の状況はビデオに撮つてあつて、それと見比べるのだそうです。クギの穴とか床の傷とか。綺麗にして出ないとまた取られます」

といつ。敷金は二カ月二十六万円収めてある。ところが覚書によると二カ月分は補修費として家主が受け取り、出る際の原状復帰の費用は敷金残の一カ月分より差し引くということになっていて、殆ど返金はないらしいとのことである。借りる時の説明では敷金二カ月分で家主が補修するということだったが、細かい字

の覚書をよく読むと確かにそのように書かれている。それでは二カ月分は敷金ではなく礼金だったではないか。礼金二カ月では借り手がないので、名目を敷金としたのだとは何とも狡猾な話であるし、覚書をきちんと読んでいなかった私の手落ちでもあつた。

夫が鹿児島に帰り、子供たち二人の生活になつてからは、それぞれの整理がいい加減になつていた。部屋一杯衣類や本が散乱していて私には何処から手を着けてよいか分からないトイレの壁や風呂場の壁、天井は黒く黴ているし台所のタイルも汚れている。荷造りの方は「一切お任せ」の引越業者に予約しておいたから心配ないが、問題は原状復帰である。

十日ほど前に卒業式を終えた三男と近くのスーパーで住まいの洗剤一式とスチールウールやスポンジ、雑巾など買い込んだ。娘は前日まで勤務で、送別会が続いていた。息子も自分の持物の整理をしなくてはならない。二人の荷物はそれぞれ行き先が違つ。息子にガス、水道、電気、電話の料金支払いと手続きの完了を確かめると、未だウオッシュレットの取り外し依頼がされていない。引越業者に依頼するがそれは別料

金になる。

前日、私と息子は朝からひたすら汚れ落としである。風呂場は天井の汚れがひどいが高いので、息子に任せた。しかし汚れがひどいと言っても狭い2DKのマンションのこと、一日でほとんど原状復帰と思われる状態になった。

引越し当日、やっと会社から解放された娘も整理に忙しい。朝九時、続々と業者の引越し要員が到着する。総勢八人。手慣れたもので、先ず私たちが手で持ち出すものや衣類を分別して印をつけて一か所にまとめる。次に送り先の部屋の略図を書いてそこに各部屋ごとのコードを決める。鹿児島行きはアルファベット、諏訪行きは数字を頭に付けて、置き場所のコードを書き込んだガムテープを全ての荷物に貼り着ける。沢山の段ボール箱を組み立て、戸棚の食器類や小物を詰め込み、先程のコードを書いたガムテープを貼ってどんどん運び出す。割れ物には中に仕切りのある箱に手際よく入れる。洋服箆の中身は、長い箱の中に紙のパイプを付けながら洋服タンスのよつなものに、ハンガーごと掛けてしまつ。さすが引越しのプロ集団であ

る。一時間半ほどであらかた持ち出しが完了。自社の掃除機を持ち込んでさつと後を掃除までして行く手際の良さ。そして嵐のように一団は去って行った。

近く中華食堂で昼食のあと、最後の磨きである。靴脱ぎ場のタイルも磨いた。幸い壁も床も傷つけていなかった。管理会社からのチェック表にその旨を書き込んだ。

鍵は最初に渡されたものと同じものでないと高額な支払いをせねばならないことになっていたので、スベアを作り本物は鹿児島島の金庫に入れておいた。その鍵とチェック表を簡易書留で管理会社に送った。こんなに神経を使つた引越しは初めてだった。

夜は長男のところで、次男夫婦も三人の孫を連れて参加して、弟妹の送別会を開いてくれることになっていた。出前の上寿司やケーキで賑やかな歓談に三時間ほど過ごした。私と引越し組は3LDKのそのマンションに何とか泊まった。翌日は父の法要のため揃って諏訪へ立つ。目まぐるしい忙しさだったが、何とか引越しは完了し、それぞれの第一歩を踏み出したのだつた。

(平成9年4月)